

COMON 概念に基づく研究評価の基本的考え方（案）

1. KPI と COMON の関係

国際卓越研究大学の申請にあたっては、大学全体の Q 値 (Top10%論文割合) などの KPI (Key Performance Indicators) が設定されています。しかし、KPI と COMON は目的と役割を異にします。

KPI は、大学全体の方向性を社会に説明し、研究活動の健全性を定点的に把握するためのモニタリング指標です。一方 COMON は、大学を構成する各部門が、それぞれの学問的伝統と研究文化に基づき、自らの研究価値を言語化し、将来像を描き、その価値を評価して部門の発展に向けた活動をするための枠組みです。

両者はスケールと機能を異にしながらも補完関係にあります。COMON は、KPI に還元できない多様な研究価値を可視化し、数値の背後にある学術的厚みと創造的挑戦を支える役割を担います。

2. 数値指標の位置づけ

COMON は数値指標そのものを否定する制度ではありません。しかし、「専門家の正しい分析によって導かれた数値」を唯一の評価基準とみなす考え方には、根本的な限界があります。なぜなら研究は分野によって評価尺度が異なり、価値の基準も時代とともに変化するからです。

論文や著作に関する指標、外部資金獲得額などの数値はいずれも、特定の前提のもとで切り取られた「部分的な事実」にすぎず、「正しい数値」という普遍的基準は存在しません。

数値を目標化すれば、研究は短期的成果に最適化され、挑戦や多様性が損なわれます。その結果、大学の研究力は中長期的に劣化します。欧州諸国が数値中心の評価からナラティブ（記述的）評価へ急ピッチで転換しつつあるのも、この反省に基づくものです。

COMON において数値指標は、目標達成を義務付けるための基準ではなく、描いた展望に向かっているかを確認するための参考情報として位置づけられます。これらの指標は進捗状況を多面的に把握するものであり、必達を前提とするものではありません。また、これらの指標は固定的なものではなく、学術や社会を取り巻く環境の中長期的な変化を踏まえ、対話を通じて必要に応じて見直す柔軟性を有します。

3. COMON における基本的な検討順序

検討は、必ず展望の記述から始めてください。指標の設定から始めるのは適切ではありません。

具体的な順序は、以下のとおりです。

- ① デパートメントが立脚する学問的伝統や研究文化を踏まえ、将来像を展望しつつ、研究の意義と価値を言語化する。
- ② それらを5つの軸を用いて整理し、それぞれの軸について部門独自の定義を行う（例：「伏流性」とは何か）。なお、部門として大切にしている要素に漏れないよう、検討の初期

段階では特定の軸に限定せず、5つすべての軸について広く検討してください。

- ③ それぞれの軸において、研究の価値が将来どのような具体的な状態として現れているのかを考え、10年後のあるべき姿（展望）を描く。
- ④ 描いた展望について、「到達しているといえる状態」を具体化する。
- ⑤ その状態に到達していること、あるいは確実に近づいていることをどのように確認できるかを検討する。
- ⑥ その結果として、指標や想定されるエビデンスを設定する。

4. なぜ指標から始めてはいけないのか

既存の定量指標から出発すると、

- 手元にあるデータや情報により視野が狭められ、目的を見失いかねない
 - 展望が「測定可能なもの」に矮小化される
 - 本来の研究価値を社会に伝えられるよう言語化し再定義する過程が制限される
- といった問題が生じます。

COMON は指標を設定する制度ではなく、研究価値を明確にし、共有するプロセスです。指標はその確認手段にすぎません。

5. COMON の本質

COMON は、研究価値を数値に還元する制度ではなく、研究価値を言語化し、共有し、育てるための対話の枠組みです。ナラティブ評価は主観的に見えるかもしれませんが、多様な証拠、複数の専門家による審議、透明な議事記録によって十分に客観性を担保できます。わが国でも科学研究費など主要研究費制度で、すでにこの方式が確立されており、単純な数値指標だけの評価は行われていません。さらに、これらの仕組みは外部監査にも十分に耐えうる運用がなされています。

健全な大学経営と責任ある研究評価を両立させるために必要なのは、数値目標の設定や追求ではなく、展望に基づく対話と証拠の積み重ねなのです。